文教大学女子短期大学部研究紀要43集，83－91，1999

母親の心理的葛藤と子育て

石 川 洋 子
家政科

Maternal Frustration and Child Care

Hiroko Ishikawa
Department of Home Economics

Ⅰ．はじめに

発達心理学の分野で、人間の一生涯に対する関心が高まっている。人間を生涯変化する存在、または変化を求める存在[1]ととらえ、その心理的、身体的変化や各年代に特徴的なできごと、心理的葛藤やその克服を詳細にとらえようと試みられている。さらに、今まであまり省みられなかった中年期に焦点が当てられるようになったのも最近の特徴であろう。

人間の生涯を追いながら、各年代特有の発達的特徴とその発達課題をとらえようとした精神発達論は、やはりフロイトに始まるであろう。そして精神分析学的観点からの発達課題提起は、その後ユング、エリクソンへと引き継がれた。

エリクソン（1963）によると、成人期初期の発達課題は他人との親密性の獲得であり、その後壮年期の生殖性の獲得へと引き継がれていく。生殖性という言葉には、我が子を産み育てることばかりでなく、自分の後へ続く者を育てるという意味を持たせているが、「子育て」という仕事は、生涯の中でやはり大きな意味を持つものであろう。

レビンソン[2]は、アメリカの男性30人に対する詳細な調査をもとに、中年期を中心とした発達段階説を提唱した。この各発達段階説には、それぞれ移行期と呼ぶ重なりの期間があり、ここで次の段階への移行の準備がなされるとする。そしてスムースな移行がなされないと、心理的危機がおとずれるとしている。

一般に、生涯を見通した発達段階説では、男性に焦点が合わされているものが多い。女性の発達も生涯という大きなスパンで見ると、同じような発達段階をふむものかもしれない。しかし、女性にとっての心理的危機の内容や生涯の中で実父や実母の持つ意味、子どもが人生に持たらすものは、やはり異なる部分もあるかと思われる。

現在、社会状況の大きな変化や少子化の影響で、子育てがむずかしくなっていると言われる。さまざまな議論がなされているが、その多くは、今現在の子どもと母親を考えるものである。しかし、社会状況や女性の価値観の変化が大きく、よりよい解決の糸口を見つけるのが追いつかない現状である。

このような状況を考えると、子育てを今という時点に限定せず、女性の生涯という長いスパンの中で見ること、そして母親の育ち、育てられ方とそれに対する母親の意識という、世代の継承の中で見ることが何からの解決の糸口を見出せるのではないかと思われるのである。

Ⅱ．目　的

母親が自分の幼少時代や両親からの育てられ方をどう振り返っているのか、またその内容が子育てにどう影響を及ぼしているのかを見るために、調査を実施した。

調査は母親が自分の気持ちを率直に表現しやすいように、主に自由記述の形態をとった質問紙調査法を用いた。調査項目は、現在の子育てや夫の子育てに対する意識、自分の育てられ方や両親に対する不満などである。

また、自由記述の項目として、現在の心境や実の両親からの育てられ方と今の自分への影響など、以下の７テーマを設定した。

①心に重くひっかかっていて、今の自分に影響していること
②子どもの頃のつらい思い出
③子どもの頃、実父がしてくれたことで印象に残っていること
④子どもの頃、実母がしてくれたことで印象に残っていること
⑤実父との思い出で、今の自分の子育てや人生に影響していること
⑥実母との思い出で、今の自分の子育てや人生に影響していること

Ⅲ．調査対象と調査時期

調査対象は、東京都内の育児支援センターに来所した母親35名である。調査方法は、質問紙を手渡し、記入後郵送してもらう方法をとった（回収率70％）。調査時期は1999年８月である。

この育児支援センターは、子どもを連れて自由に来所できる場所であり、母親たちの育児支援の目的を持つものである。筆者とは顔なじみの母親も多く、調査は無記名でもあるので、本音を記入してもらえるのではないかという予想で選定した。

調査対象の母親、父親の年齢は、表１，表２のとおりである。母親は30～34歳が最も多いが、20歳代から39歳までの幅広い層となっている。父親は30歳代が中心であった。

表１　母親の年齢

	N	%
30歳未満	8	22.9
30～34歳	20	57.1
35～39歳	7	20.0
40歳以上	0	0
計	35	100.0

表２　父親の年齢

	N	%
30歳未満	5	14.3
30～34歳	10	28.6
35～39歳	17	48.5
40歳以上	3	8.6
計	35	100.0

Ⅳ．結果と考察

１．子どもの年齢と性別

子どものきょうだい数は、表３のとおりである。きょうだい数が１人という者が65.7％と一番多いが、最初の子どもの子育てで不安になり、センターに来所することが多いのであろう。

また、きょうだい一緒に連れてくることも少なくないため、第１子で子どもの年齢を見たものが表４である。生後２週間目から連れてくる場合もあるが、子どもの年齢は、１～２歳がピークとなっている。子どもの動きが激しくなり、また自我が芽生えて子育てが大変になってくる年齢であるせいかもしれない。

表３　きょうだい数

	N	%
１人	23	65.7
２人	9	25.7
３人	2	5.7
４人	1	2.9
計	35	100.0

表４　第１子の年齢

	N	%
０歳	6	17.1
１歳	10	28.5
２歳	9	25.7
３歳	5	14.3
４歳	1	2.9
５歳	1	2.9
６歳	2	5.7
14歳	1	2.9
計	35	100.0

きょうだい数と性別の関連を見たものが表５であるが、きょうだいが２人以上いる場合の男児の割合が高い。

これは、きょうだいが増え、子どもの年齢が上がると、特に男児の動きが激しくなってくるせいかもしれない。少子化できょうだい

や友人が少なくなり、また遊び場の減少などもあって、母親が一人で男児を育てにくくなっているとも言えるのではないだろうか。センターがその機能を果しているということであろう。

表5　きょうだい数 × 性　(N)

	第1子	第2子	第3子	第4子	計
1人（男）	11				11
（女）	12				12
2人（男）	9	5			14
（女）		4			4
3人（男）	2	2	1		5
（女）			1		1
4人（男）		1	1	1	3
（女）	1				1
計	35	12	3	1	51

2．子育ての楽しさと不満感

子育ての楽しさや不満感、不安感を尋ねたものが表6～8である。

表6で子育ての楽しさを見ると、69%の者が「人が育つのを見るととても感動する」と答えている。しかし、「子育てはとても楽しい」と思えるのは、その割合が減少し40%、「どちらともいえない」とやや懐疑的な者が11%いる。

さらに「子育てに生きがいを感じる」者になると、「どちらともいえない」以下、この項目に否定的な者が合わせて34.4%となっている。母親が子育てに生きがいを感じることはあまりなくなってきた時代なのだろうか。

次に表7で子育てへの不満感、不安感を見たい。これらの7項目は相関が高かった項目であり、互いに関連があるものと思われるが、まず、「親自身、我慢が必要」「自分の時間が取られつらい」「親の自己犠牲が要求され大変」と不満感が子育ての不安感よりも強く表

表6　子育ての楽しさ　(%)

	とてもそう	まあそう	どちらともいえない	あまりそうでない	全くそうでない
1．人が育つのを見ると感動する	68.5	28.6	2.9		
2．子育ては楽しい	40.0	48.6	11.4		
3．子育てに生きがいを感じる	22.9	42.9	22.9	8.6	2.9

表7　子育ての不満感・不安感　(%)

	とてもそう	まあそう	どちらともいえない	あまりそうでない	全くそうでない
1．親自身、我慢が必要で大変	17.1	25.7	20.0	34.3	2.9
2．自分の時間を取られつらい	14.3	17.1	37.2	25.7	5.7
3．子どもが心身共に順調か心配	8.6	28.6	11.4	34.3	17.1
4．親の自己犠牲が要求され大変	8.6	17.1	28.6	37.1	8.6
5．叱り方がわからない	5.7	25.7	25.7	28.6	14.3
6．子育てに不安を感じる	5.7	20.0	28.6	25.7	20.0
7．しつけがよくわからず困る	2.9	25.7	37.1	25.7	8.6

表8　イライラ感　(%)

	とてもそう	まあそう	どちらともいえない	あまりそうでない	全くそうでない
1．何となくイライラする	20.0	42.9	17.1	17.1	2.9
2．たたいてしまうことがある	17.1	25.7	11.4	17.1	28.7
3．つい我が子に当たってしまう	8.6	25.7	17.1	31.5	17.1

明されている結果となっている。「どちらともいえない」以下この項目に否定的な者も少なくないが、現代の母親の特徴なのかもしれない。

次いで、不安感の項目である「子どもの心身が共に順調か心配」「子育てに不安を感じる」の項目がきている。「とても・まあそう」であるとしている者は37～26%みられた。

表8はイライラ感に関する項目である。これらは前出の子育てへの不安の項目などとは相関があまりなく、子育てに関しては別の因子となっていた。

「なんとなくイライラする」に「とても、まあそう」である者は合わせて63%、「たたいてしまうことがある」者は43%、「つい我が子に当たってしまう」者は34%となっている。

これらの項目への肯定率でみる限り、子育てへの不満感や不安感よりもイライラ感の方が高くなっている結果である。従来は、母親たちの育児不安の高さが問題となっていたが、最近はこのイライラ感や子どもをたたくという行為の方が表に出てきているようである。我慢や自己犠牲に対する不満も高い。子育てへの構えやそこで感じるものが変わってきているのかもしれない。

3．両親への不満感

次に自分の両親への不満感を見てみたい。

表9で見ると、「親に対して不満があった」という項目に「とても、まあそう」と肯定をしている者が合わせて31.5%いる。2項目目の思春期における両親への反発はやはり高く、半数の者が肯定している。

きょうだいとの育てられ方の違いに対する不満を示す者は、13.4%と1割強であった。

実父や実母とのかかわりを「叱られる」という行為に焦点を当てて見たものが、表10である。

両親、特に父親にはよく叱られているが、実父や実母に「よくたたかれた」の項目に「とても、まあそう」と答えた者がそれぞれ合わせて43%、31%いる。これらのことは、自分が子育てをする場合に否応なく思い出されるものであろう。両親への否定的な感情へもつながっているかもしれない。

表9　両親への不満感　(%)

	とてもそう	まあそう	どちらともいえない	あまりそうでない	全くそうでない
1．親に対して不満があった	22.9	8.6	31.4	31.4	5.7
2．思春期の頃、反発が多かった	20.0	31.4	20.0	20.0	8.6
3．きょうだいの方を可愛がっていた	11.8	2.9	23.5	32.4	29.4
4．子どもの頃、反発が多かった	11.4	20.0	28.6	31.4	8.6
5．もう少しやさしくしてくれてもよかったのにと思う	8.6	8.6	17.1	40.0	25.7

表10　実父、実母とのかかわり　(%)

	とてもそう	まあそう	どちらともいえない	あまりそうでない	全くそうでない
1．実父によく叱られた	20.0	42.9	17.1	17.1	2.9
2．実父によくたたかれた	17.1	25.7	20.0	34.3	2.9
3．実母によく叱られた	17.1	25.7	11.4	17.1	28.7
4．実母によくたたかれた	14.3	17.1	37.2	25.7	5.7
5．実父を今よく理解できる	8.6	28.6	11.4	34.3	17.1
6．実母を今よく理解できる	2.9	25.7	37.1	25.7	8.6

一方、実父、実母を「今よく理解できる」と、自分が子育てをするようになった現在、両親への理解を示す者が合わせて37%、29%いる。しかしこれらの数値は予想されたものより低い結果であった。

自分の両親への理解は、子どもの年齢がもう少し高くなってからのものかもしれない。そこまで振り返るゆとりもないのかもしれない。まだ親たちの年齢が低いということでもあろう。また、母親への理解よりは父親への理解の方がむずかしいようであった。

子育てに対する不満感や不安感、イライラ感と両親との関連を見るために、前述の表7、表8の項目を得点化し、個人の「子育て不安得点」「イライラ感得点」を算出し、その得点から母親を3群に分類した。

図1は、イライラ感による3群の分類である。また表11は、イライラ感による3群と前述の「実母のことが今よく理解できる」という項目との関連である。

図1　イライラ感得点の分布

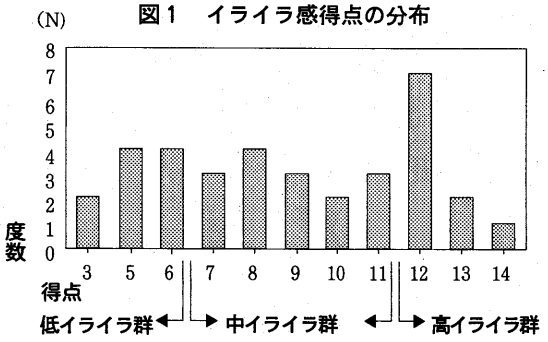


表11　イライラ感群　×　実母のことが今よく理解できる

%(N)

	実母が今よく理解できる			
	とてもそう	まあそう	あまりそうでない	計
高イライラ群	40.0	60.0		100.0(10)
中イライラ群	40.0	40.0	20.0	100.0(15)
低イライラ群	80.0	20.0		100.0(10)

表11を見ると、イライラ感が低い者に、実母のことが今よく理解できるとしている結果であった。子育てに対するイライラや焦燥感、子どもをたたきたくなるようなストレスを持つと、自分の実母の気持ちへの理解にはいたりにくいのかもしれない。育っていく人間を見守る気持ちも持ちにくいであろう。

この子育ての周辺にあるイライラ感をどう解消していくのかは、よりよい子育てへの援助の1つの方策と思われる。

4．自由記述の内容分析

自由記述の内容を分析したものが、表12～表15である。記載された内容から筆者が「＋」の内容と「－」の内容に分類した。

表12の「心の中に重くひっかかっていて、今の自分に影響していること」では、「いじめられた」「父親が酒乱だった」「長男だけ大事にされた」など、「－」の記述をした者が40%いた。予想よりも多い数値であり、30代前後の母親たちの半数が、心に何らかの重荷を持っている。そしてその内容も深刻なものも見られた。

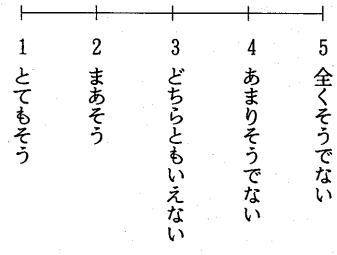
表13からは両親についての記述の数であるが、「子どもの頃、両親がしてくれたことで

表12　心の中に重くひっかかっていて、今の自分に影響していること

%(N)

－の記述	無	計
40.0(14)	60.0(21)	100.0(35)

① なんとなくイライラする
② たたいてしまうことがある
③ つい我が子に当たってしまう



印象に残っていること」については、「一緒に遊んでくれた」など両親の暖かい思い出（＋の記述）が多く語られている。しかし、この項目においても「－」の記述をした者が見られた。

表14は、「両親との思い出で、今の子育てや人生に影響していること」についての記述の数であるが、実父について「＋」の記述をした者が40％いたのに対して、実母については29％にとどまり、実母では逆に「－」の記述をした者が43％もいた。実父と実母の数値が逆転している。

前述したように、実母に対する理解が親になったことですすんでいる一方、今尚、実母のマイナスの影響を引きずっている者が多いという結果である。家庭差もあろうが、母親に対する思いの複雑さがうかがえる。

表15は夫に対する記述の内容分析であるが、両親に対する複雑な思いとは逆に、夫に対しては「＋」の記述が多くなっており、その内容も「これからも楽しい家庭を築いていきたい」といったものが多く見られた。結婚年数もまだ少なく、今はとにかく夫と一緒の子育てに一生懸命な世代ということであろうか。

5．両親と現在の人生

前述表12のように、心の中に重くひっかかっていることがあると答えた者が14名いたが、この項目の記述の有無と両親との関連を見たものが表16～17である。

表にあるように、心の中の重荷と実父との関連はあまり見られないのに対して、「心の中に重荷がある」者に、「実母が子育てや人生にマイナスの影響をしている」と答えた者が多くなっている。

その心の重荷と実母のマイナスの影響の具体的内容が表18から19である。

表19で「－の影響がある」と答えた者の内容を見ると、実父の酒乱や自殺、長男だけが大切にされたことなどの心の重荷に対して、特にその時の実母の対応のし方を批判している。

例えば、「母親によく八つ当たりされた。母親との間に距離を感じ、子育てを頼るのが嫌」「あんたたちさえいなければと何度も言われ、忘れることができない。産んで欲しくなかった」「母が兄だけを中心に考えている。きょうだいに差がつくなら子どもは１人にし

表13　子どもの頃、両親がしてくれたことで印象に残っていること　％(N)

	＋の記述	－の記述	無	計
実　父	62.9（22）	11.4（4）	25.7（9）	100.0（35）
実　母	68.5（24）	8.6（3）	22.9（8）	100.0（35）

表14　両親との思い出で、今の子育てや人生に影響していること　％(N)

	＋の記述	－の記述	無	計
実　父	40.0（14）	25.7（9）	34.3（12）	100.0（35）
実　母	28.6（10）	42.8（15）	28.6（10）	100.0（35）

表15　夫について何か感じること　％(N)

＋の記述	－の記述	無	計
54.3（19）	28.6（10）	17.1（6）	100.0（35）

ようかと考えてしまう」などである。

これらのケースで、実父に対してはそれほど強い批判がみられなかったことと対照的であった。

子育てはやはり母親がその多くの割合を占めるため、実母の対応のまずさは強く印象に残るのであろう。また、娘として父親への特別な思いと母親への通常以上の反発といった側面もあるのかもしれない。いずれにせよ、母親たちの現在の心境や人生観には、実母が心理的に大きく影響し、それを引きずっているもののようである。

これら記述された実母への思いと今の子育ての比較、例えば子育て不安群やイライラ感群との関連を調べたが、有意な関連性は見出せなかった。

個々のケースで見ても、実母へのマイナスイメージが強い者でも、子育てでは特に不満感や不安感を強くしてもいない。中不安群に位置するケースが多く見られた。

ケース数を増やしながらさらに詳細な分析が必要と思われるが、我が子という新しい命に対する期待と一生懸命な気持ちでまだ一杯なのかもしれない。子どもの年齢や母親の年代への考慮が必要とも言えよう。

一般に言われるように、自分の実母と子育ての関連を一概に論ずることは避けなければならないのではないだろうか。女性の生涯というスパンの中で、どの時期にどんな思いを思い出し、またはいつ頃まで引きずり、また新たな思いを大きく抱くのかの検討を今後の課題としたい。

表16　心の中の重荷　×　実父が人生に影響していること　%(N)

		実父が子育てや人生に影響していること			
		＋の影響	－の影響	無	計
心の中に重くひっかかっていること	有	50.0（7）	42.9（6）	7.1（1）	40.0（14）
	無	33.3（7）	14.3（3）	52.4（11）	60.0（21）
計		40.0（14）	25.7（9）	34.3（12）	100.0（35）

表17　心の中の重荷　×　実母が人生に影響していること　%(N)

		実母が子育てや人生に影響していること			
		＋の影響	－の影響	無	計
心の中に重くひっかかっていること	有	14.3（2）	78.6（11）	7.1（1）	40.0（14）
	無	38.1（8）	19.0（4）	42.9（9）	60.0（21）
計		28.6（10）	42.8（15）	28.6（10）	100.0（35）

表18　心の中の重荷と実母が人生に影響していること（＋の記述）　（NO.はケース番号で同一人を表す）

心の中に重くひっかかっていて、今の自分に影響していること	実母との思い出で、今の子育てや人生に影響していること
記　述　有	＋の影響の記述
1．小学生低学年の頃、気が弱くイジメられっ子だった。	1．放任主義でうるさく言われなかったので逆に自分自身でしっかりやってこれた。
2．小学生の頃、上級生にいじめられたことが今もまだ心に残っている。	2．すべてに影響している。

表19　心の中の重荷と実母が人生に影響していること（－の記述）　（NO.はケース番号で同一人を表す）

心の中に重くひっかかっていて、今の自分に影響していること	実母との思い出で、今の子育てや人生に影響していること
記　述　有	－の影響の記述
1．酒乱の父にたたかれたこと。	1．家庭内でけんかが絶えず母によくやつあたりされた。母との間に距離を感じ今でも子育てを頼るのが嫌だ
2．親戚の姉の絵にいたずら書きをしておこられ悲しかったこと。	2．ほったらかしにされていた。よく怒られたり、たたかれたりした。自分もイライラして怒ってしまうのは気をつけたい。
3．うつ病になり、ノイローゼ、神経症になった。	3．一番苦しい時に理解してもらえず、きびしくつっぱねられたので、子どもの心をくめる自分になりたい。
4．トイレができなくて母にたたかれたことが恐い思い出として残っている。	4．子どもがトイレができなくとも手をあげないようにしている。たたかれると気持ちが萎縮してしまうので気をつけている。
5．親が妹ばかりに目がいくことに腹を立てた反面、素直でやさしい姉を演じていた。	5．母は妹のことで大変悩んだり、体力的にもきつく、自律神経失調症になりイライラして私をよくたたいた。自分も母に似ていると感じるが、自分の気持ちだけでは爆発しないように心がけている。
6．ピアノが苦痛で親の気持ちが負担だった。	6．母が仕事をもっていて忙しかったので、遊んでもらった記憶があまりない。自分の子どもとは思い出はたくさん作りたい。
7．けんかで姉が悪くても2人共怒られた。姉が嫌いになり、今だに顔を見るのも話すのもイヤだ。	7．母は忙しいと言って私の話をよく聞いてくれなかった。あいまいな返事ばかりだった。子どもの話をよく聞いて理解できる母親になりたい。
8．長男だけ大切にされた。自分は妊娠6ケ月まで気づかれなかった。望まれて生まれたのだろうか、と思う。	8．母が兄だけを中心に考えている。兄妹に差がつくのなら子どもは1人にしようかと考えてしまう。
9．父の会社が倒産。自分は結婚し、2番目の子が2歳の時父が自殺。今でも心の中に重すぎるほどひっかかり前へ進むことができない。	9．「あんたたちさえいなければお父さんと一緒にいない」と何度か言われた。耳の奥にその言葉が残っていて忘れることができない。私自身産んで欲しくなかった。
10．母と一緒に遊んでもらった記憶がない。そのせいか我が子への接し方にとまどうことが多い。	10．母は愛情の表現、子どもの心を感じるのが下手な人だった。よく母とはぶつかった。いい子になって可愛がってほしかったので、母の言うとおりの進路に進み、反動で反発もした。今は母なりに一生懸命だったと信じる。
11．あまり一緒に遊んでくれない。ほめてくれない。	11．遊んでもらっていなかったので、なるべく一緒に遊んでやろう、よいことはほめてあげようと思う。

V．まとめ

母親が自分の幼少時代や両親からの育てられ方をどう振り返っているのか、その内容が母親自身の子育てにどう影響しているのかを見るために、自由記述を中心とした調査を行った。調査対象は、東京都内の育児支援センターに来所した母親35名である。

支援センターに来所した子どもの性別を見ると、きょうだい数が2人以上いる場合の男児の割合が高い。少子化や社会環境の変化などで、少し年齢の高くなった男児を母親が一人では育てにくくなっているのかもしれない。

子育てに対する意識では、不安感よりも自分の我慢や自己犠牲が必要であることへの不満感、イライラ感の方を強く持っているようであった。

自由記述をもとに母親のさまざまな心境を見ると、「心の中に重くひっかかっていて、今の自分に影響していること」があると答えた者が40%いた。その内容も深刻なものも見られる。

また、心の中に重荷を持っている者に、「実母が子育てや人生にマイナスの影響をしている」と答えた者が多い結果であった。その心の重荷の出来事に対する実母の対応のし方を強く批判をしている。子育てでは母親がその多くの割合を占めるため、実母の対応のまずさは強く印象に残るのであろう。その底辺には、娘として、実父と実母への思いの違いもあるかもしれない。

しかし、個々のケースを見ると、母親へのマイナスイメージが強い者でも子育てへの不安感やイライラ感が特に強い結果ではなかった。

この結果を見る限り、子育てと自分の実母との関連を一概に論ずることはできないように思われる。女性を生涯というスパンの中で見つめ直すことが必要であろう。

最後に、本調査にご協力いただきました渋谷区育児支援センターのみなさまとお母さま方に、厚く御礼を申し上げます。

VI．引用文献

1）「生涯発達学」
R.M.Lerner and N.A.Busch-Rossnagel
上田礼子訳、岩崎学術出版、1990
2）「人生の四季」
D.J.Levinson　南博訳、講談社、1980